

最後かもしれないベトナムの旅

「 Moriさん、今年も行く」と松村直治さんに電話で誘われた。

「あの少数民族の村で、一泊できるなら」と応じた。

「それは来年や。ゴメン。今年は、おばちゃんたちの希望（を） 優先や」

昨年5月、台湾旅行で知り合った松村さんは「毎年仲間を募って」ダナン（ベトナム）に出かけている、と語った。「今年は6月中旬」と聞き、即刻最後のメンバーとして乗り、翌月18日（大阪が震源地の地震があった朝）から出立した。そしてホーチミンルートをたどった日に、少数民族の村に立ち寄ったが、その折にその集会場（神が宿る祈祷場）に「泊めることもできる」と族長に言ってもらえた。「ならば、来年は…」と松村さんと仮契約（？）した。

「来年こそ、あそこに」と松村さんに頼み、「まかしといて」と返事をもらった上で、今年の6泊7日の計画に乗ったわけだが、実は、この約束は破られることになった。そういえば、電話で松村さんはガンの進行が急となり「もうあかんわ」と話していた。だが、「まさかそこまで」とは思っていない。「来年こそは！」との念押しもかねて、出かけた。

松村さんの出生地は中国東北3省で、引揚者だった。長じて商社に努め、ダナンに駐在。その功績の関係だろう、ダナン駐在が通算8年におよび、生涯で最も長期間滞在した地（父の職業柄、頻りに転居したらしい）になった。それも私が松村さんに惹かれた理由だ。私は逆に、病床勝ちの父のおかげか、疎開地の京都は小倉山の麓を「終の棲家」と決め、生涯を終えようとしている。また、昨年は（ダナン旅行の後に）傀儡国家満洲（中国東北3省）旅行の予定を入れていたので、松村さんが生まれた頃の満洲の空気も推し量っていた。

「おばちゃんッテ 誰のことですか」と私は気になった。

「昔の部下とか、大勢や。世界1の洞窟なんかを希望」している、という。

これがトドメになった。松村さんの気性や性格を知り得たつもりになっていたし、惹かれていたが、「案の定」との気分になされた。加えて、「あの定宿（や、と松村さんがいったホテル）にはもう一度泊まりたい」と昨年ベトナムを離れる時に思っていた。

実はもう1つ、参加したい理由があった。昨年の台湾旅行で同じく知り合った高安先生との約束を思い出したからだ。その後、付き合いが始まり、昨年のダナン旅行の話を生先生にしたが「今度は、私も」と頼まれていた。

かくして、2019年6月16日、日曜日の早朝07:15に関空ベトナム航空カウンター近くで集合し、「元かしまし娘です」という女性たちを紹介された。昨年度の、退職後に昆虫のムシ（おらが街の昆虫博士）になったと聞いた人など顔なじみはもとよりかお、落語にか欠けては「玄人はだし」と聞いた新メンバーなど総勢14名の旅が始まった。

16日 12:05 DN着 天候は昨年と同じく一番暑い時期だった。

街で昼食と、貴金属店で両替。ホテルでチェックイン。そこで松村さんの定宿は1つではなかったことを知った。昨年の先着組・昆虫博士などが泊っていたホテルで、同じく庶民的なこじんまりしており、心地よい。昆虫博士も、ダナン愛好家で、常連のご様子。

翌朝食時に分かったことだが、このホテルの食堂は1階（前回のは最上階で、7階だったように思う）で、天井が高く、バイキングではなく洋風とベトナム風2種の定食メニューだった。

この旅で最初に思い出すことは3つ。まずダナンをうろつき始めた時に目に留まったもので、ヤシの実の販売ケースにあった4カ国語（3?）の表示。かつては、パリでも日本語表示をよく目にしたものだが、近年は日本語表示が訪れる各国各都市から消える傾向にある。貧すれば鈍する国になってはイケナイ、と思った。次いで日本製の電動自転車。「欲しい」と願った。そして翌朝の食事時。松村さんは「昔の部下とか、大勢や」に囲まれていた。



25人乗り専用バスは DN近郊の フエに着いた。フエは「日本橋」とも呼ばれる橋がある世界遺産だが、私は3度目。昨年と、その前のベトナム旅行2度目の折。





全員で集合写真。果物をいたるところで売っていた。



次いでハイバン峠（は昨年につき）を再訪。丘からベトナム王国とチャンパ王国の「あれが境目や」との背が高く彫り物があるポールが、あるいはランコウ湾（一大レジャー地）などが眺めた。丘には当時の要塞、ベトナム戦争時に築いた美意識に欠けたコンクリートのトーチカ。



その道中でパイアの花を見た。



次いで、さる老婆の逸話で知られる天姥寺（ティエンム一寺）を再訪。この度は塔を見上げるだけでなく、「息が持ちそう」と思い、孔子も関わるといふ本本堂（？）まで踏み込んだ。



ここで、松村さんの「昔の部下とかや、とおっしゃる」お一人に、高安先生と一緒に写真に収めてもらった。もちろん私より高安先生の方が、悔しいが、はるかに信頼をよせられていた。



昼食は緑豊かなレストランで、ベトナムの「餅三昧」となった。粽（ちまき）のごとき餅もあれば、スルツと喉に流れ込む餅もあった。



「餅三昧」の後、グエン王朝の王宮をバスで一巡りし、



米軍基地があったにケソン戦争博物館へ。





米軍は、支配力を維持せんがためにあらん限りに殺傷兵器や毒物を投入した。



ベトナム人は弓矢、落とし穴、あるいは象も繰り出して戦い、独立を目指した。





だからだろうか、戦死が5万人の米軍だが、復員しその3倍もの兵士が自殺したという。



今もって私には、どちらを勝利者にしてよいのかわからない。それは、勝利気分でまだ猛々しさが残っていた最初のベトナム旅行時からの疑問だ。ベトナムには、アメリカ製品が氾濫し、ドン紙幣よりドル紙幣の方が強そうだし、服装はアオザイなどの民族衣装が次第に見られなくなる傾向で、アメリカ化している。



自給自足のような生活を営んでいた村が幾つ壊されたことか。枯れ葉剤やナパーム弾も用いて攻撃し、自己責任の下に自己完結した暮らしを可能とする上で不可欠となるのが生態系だが、それを支える肝心要の豊かな自然を無残にも破壊してしまった。



ラオスとの国境であり、ホーチミンルートであったダクロン橋のふもとに至ると、アボカドの実がたわわにぶらさげた木があった。その近くにある、免税店があるホテルに泊るという。



ホテルのロビーに免税店があったが、名ばかりで、かつてのソ連やカザフスタンに似ていた。



18日は Lao Baoから Ving Muokトンネルと Phong Nha Cave を目指し出発。その近辺のホテルで泊という。

まず、近代的スーパーマーケットに立ち寄ったが、早朝で人の出はなく、閑散としていた。商品は諸外国から流れ込んでいるが、いまだアメリカ風消費社会にはなっていないようだ。



フランス植民地時代の牢獄跡を訪ねた。ガランとした木立の数千平方mの空地に、何かが散在している。その何かより、太い木立が日光を遮り、涼し気でのどかに見える。だがその樹に近づいて、まずビックリ。到底登れそうにない。



点在する遺物は残酷の限りだ。政治犯をそれほど憎み、怖れたのだろう。ベトナム人が求める自由は、命より尊いのかもしれない。フランスは、ベトナムの民の「生命と財産」は喪盛りはしても、「自由」を守ってほしい民は許さなかったのだろう。



次いで、ビンモックトンネルを訪ねた。最初のベトナム旅行では、サイゴン近郊にあるクチのトンネルを見学したが、それは戦闘用トンネルで、仰天した。4段式に地下に築かれており、米軍は、火責め、ガス攻め、水責めなどあらゆる手段を講じたが、ついに墮せなかった。

この度は、巧妙な防空壕で、600人の村人が命をつないだ。トンネルがある一帯は、爆弾が作った大きなカルデラが無数に点在していた。1トン爆弾ぐらいでは崩れないトンネルを村人はうがったのだろう。家族用の部屋がトンネルの左右に掘り込まれていた。その1つが出産室だが、そこは断崖（にうがった出入り口）に近く、新鮮な空気取り入れやすい位置だった。





その出入り口から光が射しこむ。ひきつけられ、外に出ると植物の緑と海の青が待っていた。赤子は抱かれて、この海を眺めながら新鮮な空気を吸って、世に出たのだろう。



また専用バスの人となり、ベトナムを南北に割いていた旧国境線に向かった。やがてドンホイに至り、17度線に沿った大きな川が見えた。向こう岸は北ベトナムだったわけだ。手前にはベトナム戦争博物館があった。長い鉄橋が見える。その橋の中程にはベトナム国旗がはためいている。米軍が越すに越されぬヒエンルー橋であった。

この橋の手前で休息し、茶店にも入ったが、そこにカタコトの日本語を話す青年がいた。日本から一時帰国とかで、技能実習生という。日本観を探りなくなった。良い印象の持ち主で、ホッとした。近く日本に向け載出発するという。





Phong Nha Cave を訪れた。今は世界遺産のホンニャケハン国立公園にある。これでベトナムは4回目の訪問だが、旧北ベトナムに入るのは3度目だが、北の地域でも民族衣装の女性が蛾期限している。小舟で水草を刈り取る女性が大勢いたが、アメリカ風の服装だった。

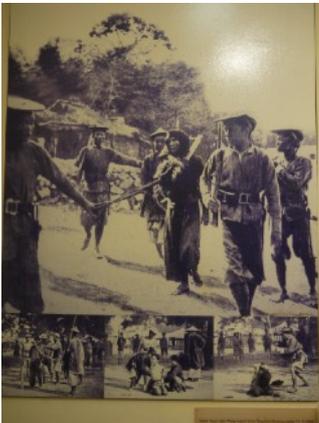




洞窟を出て DNに取って返すことになった。DNのホテルを起点に残る3日を過ごす。

20日 周辺観光 チャム彫刻博物館やダナン市博物館。





ミーソン聖域・世界遺産の遺跡を、炎天下に再訪した。



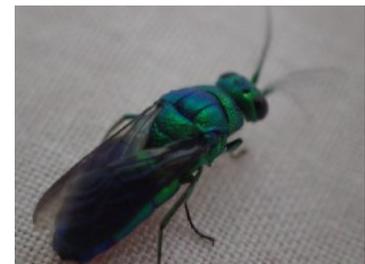
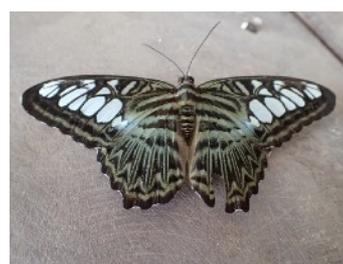


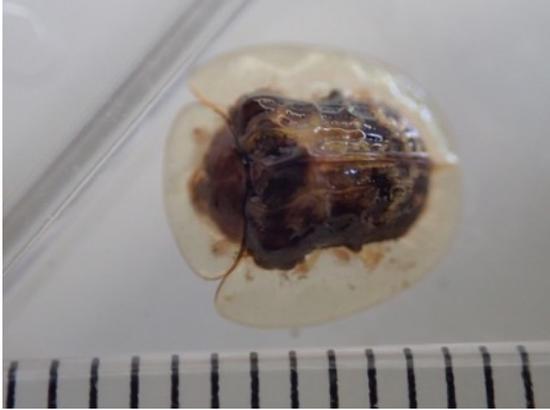
21日 DN から Bak Ma山に出かけ、 Vija Chipを見学し、DNIに戻る。



やっと高安先生と私は、松村さんの「元部下とか」とおっしゃる女性軍に認められ、写真に収めることができた。バクマ山は、フランスの植民地時代の避暑地だったが、ベトナム戦時代は米軍のヘリコプター基地になっていた。今も野生生物の宝庫で、それらの殺傷は許されず、昆虫博士に頼り、写真に収めるにとどめ、逃がした。

巨大なミミズが棲まう、とパンフレットで知ったが、私が見かけたのは、わが家の庭の20cm程の大物をの上回る程度に過ぎなかった。







22日 ついに最後の1泊になった。深夜0:05発で関空目指して出発だ。この日は市内で買い物日に当てられた。私は皆さんにコーヒー専門店を推薦した。前回、松村さんに、ベトナムはコーヒー豆の一大生産国であり、しかも「うまい」と聞き、再度買い求めたく思ったからだ。



ベトナムらしい市にも出かけた。ここで私は海産物を求めた。



私の願いもあって、総合雑貨店も訪れた。



夕食は海辺に出かけた。





関空にはほぼ予定通りに、23日の7:00に到着。

両替は2万円ずつ繰り返した、その宝飾店では4,260,000ドンだった。十二支は、牛が水牛に、うさぎがネコに、ヒツジがヤキに、そしてイノシシがブタに置き換わっている。



もちろん様々な麺類や、一皿食も楽しんだ。ベトナムの食事は、和食好みの舌によくあう。

松村さんは、パルプのチップを対日輸出する業務に関わり、現地会社の2代目社長を務めた。だから今回もその会社を訪問したが、その功績はパルプ材をユーカリからアカシアに替えた事ではないか。ベトナムの植林地は、今やアカシアが占めている。だが、国としては、チップの輸出ではなく、紙にして輸出することを願っている、という。

ベトナムは農業国の一面もあり、米、茶、果物、コーヒーなどの他に、今やキャスタバの畑も広がる。だが、港湾では、コンテナ船より旅客船を優先するようになっているとか。

その他にもさまざまなことを学んだが、松村さんが壮年時代に若い女性の部下など大勢の女性に等しく親しまれ、慕われている姿に触れたことが大きかった。私は願う男の姿だ。その女性たちのメガネや嗅覚に、高安先生と私は合格したようで、これが大きなご褒美の旅でもあった。



松村直治さんにご冥福を！